

はじめに

本書は、筆者が2017-2019年に埼玉大学で行なった講義の内容をまとめたものである。2021年には新潟大学と戸田市民大学でも一部をお話する機会をいただいた。当時の学生・受講生・関係者の皆様にお礼申し上げる。

埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書は本来、本学部教員の研究成果を発信するために始まったもので、講義内容をまとめた本書のようなスタイルは異例である。しかし、本学部の研究成果だけでなく教育実績も世に出すことで、すでに15号を数え、本学部の顔となったりリベラルアーツ叢書をさらに発展させられるのではないかと考えるものである。

本書を手にした方が、ロシア文学と近代文学全般への関心を多少なりとも持っていていただければ、筆者としてこれ以上の喜びはない。

本書の原稿が完成し、上記の序文も書いた直後、突如としてロシア軍によるウクライナ侵攻が始まった。本来であれば、本書の内容に何らかの反映を試みるべきだったかもしれないが、時間的・能力的にかなわなかった。ウクライナの人々の苦しみはいまだ終わっておらず、今後事態がどう推移するかも見通せない。本書で取り上げる作家の何人かはウクライナ出身であり（ゴーゴリ、ブルガーコフ、グロスマンなど）、今回の戦争が道義的にも文化史的にもまったく間違っただけであることは申し添えておきたい。

なお本書は、日本学術振興会の科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号20H01246「二十世紀ロシア文学の発展に関する総合的研究：異化・越境・ポスト近代を鍵概念に」の成果報告の一環として刊行される。

2022年5月

著者